

## あまだい類



日本周辺の主分布域は東シナ海、対馬海峡域、日本海南西海域で、高知県では、アカアマダイ *Branchiostegus japonicus* (写真右下)、シロアマダイ *Branchiostegus albus* Dooley (写真左) およびキアマダイ *Branchiostegus auratus* (写真右上) の3種の生息が確認されています (井出他 2003)。本県ではビタとも呼ばれ、美味とされています。

高知県水産試験場では、平成 15 年 (2003 年) から 3 年間あまだい類の資源生態などを調べました。以下は主としてその報告書 (明神 2007) からの抜粋です。

### 資源生態

本県でのアカアマダイの産卵については、雌は満 2 歳から産卵に加わり、産卵期は 4-11 月、産卵盛期は 7-10 月とされています。アカアマダイの成長については、3 歳までは良いのですが、それ以降は鈍り、雄が TL (全長) 45cm 前後、BW (体重) 1.0-1.3kg で、雌が 30cm 台前半、0.4-0.6kg で頭打ちになるようです。漁獲物に占める雌の割合は、TL30cm をピークにして低下し、TL40cm 以上の雌は確認されていないことから、雌よりも雄の成長が良いことがわかります。

通山 (1975) は、昭和 49 年に土佐湾で行われた潜水調査船“しんかい”による海底調査の様子を報告しました。それには、アカアマダイが巣穴を出入りする行動が記述されています。また、若狭湾では、超音波テレメトリーを用いた放流実験が行われ、夜は主に海底の巣穴の中に滞在して、昼は巣穴の外へ移動するという日周行動をすることが明らかになりました (Mitamura *et al.* 2005)。

また、最近になって、日本周辺のアカアマダイの集団間には遺伝的な差異は少なく、一つの大きな集団を形成しているとの研究結果が報告されています (柳本ほか 2010、Nohara *et al.* 2010)。これは、卵仔稚魚の浮遊期間が約 90 日間とされており (奥村 2002)、卵仔稚魚が黒潮や対馬暖流によって流され、各地に着底した結果であると考えられます。

## 漁業実態等

アマダイ類は、ほとんどが土佐湾で延縄漁業や立縄漁業によって漁獲され、宇佐、久礼、佐賀などに水揚されます。室戸岬以東や宿毛湾での漁獲は土佐湾に比べごくわずかです。アマダイ類3種の生息水深は、シロアマダイ、アカアマダイ、キアマダイの順に深くなり、同じ順で単価は安くなります。延縄漁業で主に混獲される魚種は、キダイ（本県では一般的にレンコ（ダイ）と呼ばれます）、いとより類（イトヨリダイ、ソコイトヨリ）、チダイです。

## 漁獲動向

図1に高知県漁協の安田町、宇佐統括、佐賀統括および下ノ加江の各支所に水揚されたアマダイ類の漁獲量と、高知農林水産統計年報に記載された県全体のアマダイ類の漁獲量の経年変動を示しました。4支所合計のアマダイ類の漁獲量は、平成2-5年（1990-1993年）に12-15トンで推移し、平成5-10年（1994-1998年）には20トンを超えるレベルまで増加しました。しかし、その後減少し、平成11年（1999年）以降は平成14年（2002年）を除き10-15トンで推移しています。1980年代の宇佐および佐賀の動向も考慮すると、県全体の漁獲量は全体として減少傾向であると考えられます。

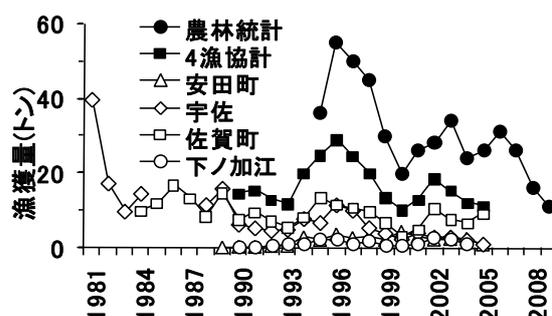


図1 高知県におけるアマダイ類漁獲量の経年変動（高知農林水産統計年報および各支所の資料による）。

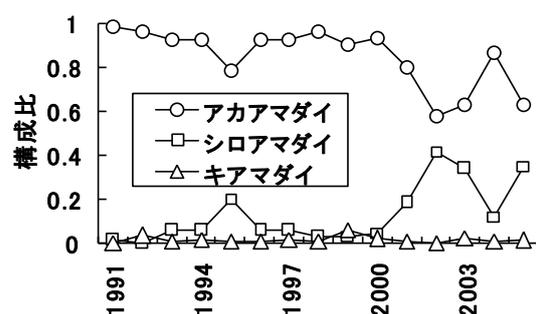


図2 高知県漁協宇佐支所におけるアマダイ類3種の漁獲量構成比の経年変動。

## アマダイ類3種の漁獲割合

平成16年（2004年）と平成17年（2005年）に安田町支所で行った市場調査結果によると、アマダイ類3種の比は、アカアマダイ、シロアマダイ、キアマダイの順に、漁獲量ベースで87.8:11.9:0.3、尾数ベースで93.2:6.6:0.2でした（図2）。また、3種の漁獲量が明らかな宇佐統括支所における3種の構成比の経年変動を図2に示しました。2000年代に入って、アカアマダイの構成比が減少し、シロアマダイが増加しました。3種の比の平成3-17年（1991-2005年）の平均値は、アカアマダイ、シロアマダイ、キアマダイの順に0.85、0.13、0.02でした。キアマダイの割合が低いのは、資源尾数そのものが少ないという可能性も考えられますが、3種の中では最も単価が安く生息水深が最も深いため、主たる漁獲対象になっていないためと考えられます。